

提灯のあかりがつなぐ 成長への願い

～芦安地区小曾利の祇園祭～

辺りがうつすらと闇に包まれ、西の山端が沈んだ太陽の光で縁どられる頃、小曾利の道祖神場に続く道に提灯が灯されます。7月14日、芦安小曾利地区の祇園祭が始まりました。

祇園祭は平安時代の旧暦の6月、京都東山の祇園社（現八坂神社）で疫病を防ぐため始められた祇園会がルーツです。祇園社には疫病を司る牛頭天王が祀られ、その後、日本の神様である須佐男尊と同一視されました※1。祇園信仰は時を経て全国に広まり、かつて市内でも多くの地域で行われていたようです。現在は芦安地区、百々地区で続いており、飯野地区のお灯籠祭りも同じルーツと考えられます※2。

芦安では、小曾利と古屋敷で祇園祭が盛大に行われていました。明治初期には奉納相撲が行われ、若者から中年まで競い合ったそうです。平成に入っても数年前まで、それぞれの地区の通りは提灯で飾られ、その



古屋敷のヤグラ



ヤグラの前で集う小曾利

道辻には「ヤグラ」と呼ばれる仮設の門が建てられました。ヤグラにはいくつもの彩色された灯籠が飾りつけられ、夏の夜を彩りました。「ヤグラ」は飯野や百々では「チヨウマタギ」と呼ばれています。

古屋敷の祇園祭は須佐男尊を祀る鎮目大神社の祭り、祇園祭本来の姿を残しています。現在では人手不足から、ヤグラも提灯の献灯も行われなくなり、神社の清掃だけとなっています。一方小曾利は、火事を防ぐ火伏せの神様を祀る秋葉神社の祭りとして習合しています。小曾利集落から御勅使川を挟んで南側の山中に前宮（めえみや）と呼ばれる秋葉神社の社があり、かつてはそこに口ウソクで献灯したことを合図に、ヤグラの灯籠と通りの提灯、道祖神前の秋葉神社常夜灯に火が灯されました。現在でも前宮には火は灯されませんが、人手不足から花形であるヤグラは数年前から建てられなくなりました。



常夜灯と道祖神（小曾利）



鎮目大神社（古屋敷）



夕闇の中、小曾利の中心を歩いていくと、灯された一つ一つの提灯に、それぞれ名前が書かれていることに気づきます。これは子供が生まれるとその子の健やかな成長を願って、子供の名前を書いた提灯を奉納する慣習があったからで、数世代続く家族の提灯も見られます。名前入りの提灯は太平洋戦争後に始められ、「提灯は甲府の朝日町の店に地区で頼んださ。下に降りた人たちがこの日は上がってきて提灯を眺めてなあ、お盆さんより賑やかだったさ。」と小曾利の森本さんは懐かしそうに話されました。



一度ヤグラの灯りは途絶えました。けれども、「ぎれいだったなあ、にぎやかあったなあ」。その思い出をきっかけに、新たな人々を交えて、小曾利のヤグラが今年復活することになりました※3。ヤグラに灯る灯籠や提灯の灯りは、人と人、世代を結ぶ地域の明かりでもあるようです。

※1 芦安では大曾利に牛頭天王社が祀られ、明治時代12月25日に祭礼が行われていました。現在は諏訪神社に合祀されています。
 ※2 南アルプス市広報の平成30年8月号に飯野地区お灯籠祭、平成31年4月号に百々地区祇園祭の記事が掲載されています。
 ※3 小曾利の祇園祭 7月14日19時頃点灯。場所道祖神前（芦安窓口サービスセンターから西へ約300m）。